
ハズバンド

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハズバンド

【Nコード】

N3795P

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

ハズバンド（夫）と名づけられた真っ黒い犬と、いつも遊びほうけて家にいないおじいちゃんのお話。

ハズバンドは犬

ハズバンドは、私の家の隣の隣のそのまた隣のおばあちゃんの家で飼われているラブラドル・レトリバーだ。

何故ハズバンド「夫」と言う名がこの真っ黒くてデカイ犬に付けられたのか。

それを知ったのは私が中学三年生のときだ。

受験生の私は小うるさい母親から逃げて、おばあちゃんの家でスイカを食べていた。

勉強、勉強うるさい母にも、ガンガン照り付けてくる太陽にも、ポタポタと垂れるスイカの汁にも、もうすぐ終わってまう夏休みにも私はイライラしていた。

私は勝手に冷房を19度に設定し、勝手におばあちゃんの切ってたスイカを食べていた。

「あら、いらつしゃい。来ていたのね」

スイカへの苛立ちが頂点に達したとき、おばあちゃんが帰ってきた。

「お帰りー。ハズバンドのお散歩？」

「そうよー。ああ涼しい！」

おばあちゃんは無断で家に入り込んでいた私に嫌な顔一つしなかつた。

ハズバンドが我先にと居間にあがってくる。

「待って、ハズ！ 足拭いてからよー」

おばあちゃんはいつでも優しい。

その優しさが心地良くて、私は小さいときからおばあちゃんの家遊びに行くのが大好きだった。

おばあちゃんの家と私の家の間取りはほぼ同じだ。

どうして一緒に住まないのかというと、狭いから。私と弟と父と母で暮らすには少し狭い家は、おばあちゃんとおじいちゃん、ハズバンドだけで住むにはちょっと広い。その広く快適な空間も大好きだった。

「そう言えば、おじいちゃんは？」

私はこの家のもう一人の住人の行方を訊いた。

心配してのことではない。答えはたぶん、二日前弟とここに遊びに来たときと同じだ。

「お父さんはお友達のところへ行つて。夜には帰ってきますよ」

おばあちゃんは座っている私にお茶を淹れてくれた。

ハズバンドもおばあちゃんについてきた。

私はお正月以外、昼間におじいちゃんを見たことがない。

いつもどこかへ遊びに行っている。おばあちゃんをおいて。

「やっぱり」

「でもねえ。昨日言われちゃったの」

おばあちゃんは堪えきれないようにクスクス笑いながら言った。

「なんて？」

「頼もしいハズバンドのおかげで、かわいい私を心配せずに遊びに行けるって」

私の太ももに顎を乗せたハズバンドの耳を触りながら、私はちょっと怒った。

「なにそれ！ おじいちゃん、ハズバンドが来る前から遊びほうけてたじゃん！」

怒りを静めるため、お茶を飲もうと湯飲みをグツと掴んだら、思いのほか熱かったのでやめた。

なんだか恥ずかしくなって

「ハズバンドもヒドイと思うよねー」

とハズバンドの頭をガシガシ掻いたら「ブブっ」と鼻を鳴らされた。

「でもねえ、やっぱり私もハズバンドがいてくれて良かったと思っ

ているの」

おばあちゃんがそう言うと、言葉が分かったかのようにハズバンドは私から離れておばあちゃんの横に寝そべった。

私はハズバンドを睨んで、そう言えばなんでこのバカ犬を飼ったんだろうと疑問に思った。

私が小学六年生のとき、おばあちゃんの家遊びに言ったら、真っ黒で小さい犬がいて、

「かわいいー!」「何て名前?」「これ狼?」「犬なの? 種類は?」

と質問攻めにしておばあちゃんを困らせたが、「どうして飼ったの?」とは訊かなかった。

聞いたら教えてくれたと思うけど、珍しく家にいたおじいちゃんが
おばあちゃんの横で、真っ青な顔で首を振っていたことと、おばあちゃんがとてもとても機嫌が良くて少し不気味だったから。
なんとなく聞けなかった。

でももう時効だろう。

「どうしてハズバンドを飼うことにしたの?」

思い切って訊いてみた。

「あら、言ってなかったかしら」

おばあちゃんはちよっと目をつぶって、そして話し始めた。

それはおじいちゃんが定年を向えてから二年目のことだった。

いつものように帰りが遅いおじいちゃんのご飯を、いつものようにラップに包み、おばあちゃんはいつものように新聞を読みながら、おじいちゃんの帰りを待っていた。

いつもと違ったのはその日はおばあちゃんの誕生日だった。

「こんな年になると誕生日なんてないようなものよ」

誕生日なんて気にしてない。そう言いながらもおばあちゃんはケーキを買っていた。

大好きなショートケーキ。こんな日じゃないと、食べる機会もないから。

おばあちゃんは一人、おじいちゃんを待った。

いつもよりちよっと遅く、おじいちゃんは帰ってきた。友達を連れて。

おじいちゃんは酔っぱらっていた。

「おう！ 飯はいいから、茶あ出せやー」

一言目はそれだった。

ラップに包まれた料理を見ておばあちゃんはため息をついた。

机を片付け、お茶をだす。

連れてきた友達は、どうやら元部下の人らしい。

台所に戻り、茶菓子に甘納豆でも出そうかと思っていたおばあちゃんに、おじいちゃんは言った。

「それ、そこにある奴！ ○○屋のケーキか！ おいコイツに出してやれ！」

おばあちゃんは言われた通りにお客様とおじいちゃんにケーキをだした。

翌日、卵焼きの味が薄いと文句を言われたおばあちゃんは、遂にキレた。

黙って中華鍋をおじいちゃんの頭に向って振り上げたのだ。

間一髪、避けたおじいちゃんは、そこで初めて泣いているおばあちゃんに気がついた。

「いい加減にして！！ どうしていつも、勝手なのよ！！」
ガンツガンツガン。

おじいちゃんは中華鍋で殴られながら、どうしてコイツはこんなに怒っているのだと不思議に思った。

ガンツ「いいじゃない！」ガンツ「私の！」ガンツ「誕生日なんだもの！」

「ケーキぐらい食べたかった！！」

叫び終えたおばあちゃんは、呆気にとられているおじいちゃんを放つて、鍋を台所に片付けに行った。

何事もなかったかのように洗い物をしているおばあちゃんに、おじいちゃんは言った。

「そうかー。昨日誕生日だったか。いやすまん！ すっかり忘れていた」

「今更遅いですよ」

背を向けたまま、おばあちゃんは呟いた。

「よし！ 誕生日祝いだ！！」

「え?!」

「犬を飼おう！」

そしてペットショップで不貞腐れているような真っ黒い小さな犬を見つけた。

その犬はおばあちゃんに抱かれると、可愛く鳴くでもなく、目をウルウルさせて見つめるでもなく、フガフガと言いながら鼻を押し付けた。

フガフガヒそしてブヒユンとくしゃみをした。

到底可愛くないこの小さな犬を見て、店員さんは苦笑した。

おじいちゃんは「もっと小さい犬にしよう」と言った。

おばあちゃんは「この子に決めます」と犬を抱きしめた。

ダンボールに入れて連れ帰った。

帰り道、おじいちゃんが

「名前はなにしようか」と聞いた。

二人と一匹で歩く。夕暮れの中。

「もう決めてあるんですよ」

おばあちゃんはおじいちゃんを見つめて言った。

手の中にいる子犬もおじいちゃんを見上げていた。

おじいちゃんは沈んでいく夕日を眩しそうに見ている。

「おう、お前が決めてるならいいよ。でも俺はジョンがいい」

「ハズバンド」

おばあちゃんはおじいちゃんの言葉を遮って言った。
力強く、はっきりと言った。

「え？ 何で「夫」なんだよ」

おじいちゃんは困惑したようにおばあちゃんを見た。

何故か手の中にいる子犬も困ったようにおばあちゃんを見上げた。

「ふふつ。この子は頭がいいのね。私の言葉が分かるみたい」

おばあちゃんはそっと犬を撫でた。

二人と一匹は家路に着いた。

「で。何でハズバンドなの？」

話を聞き終えた私は、ゆつたりとお茶を飲んでいるおばあちゃんに聞いた。

おばあちゃんの意外な一面にはびっくりしたが（だって中華鍋で人を殴るんだもん）今はハズバンドの名前の由来の方が気になる。

「本当はね、ダンナって名前にしようと思ったの」

「どっちにしても夫なんだ……」

おばあちゃんは優しく、寝そべっているハズバンドを見つめている。

「もうねえ、お父さんは私の夫じゃなくてもいいかって。」

と言うより、私はお父さんの妻なんて願ひ下げよって」

「じゃあ、今の夫はハズバンドってこと？」

ハズバンドがブヒツと鼻を鳴らした。

「そうね」

「じゃあ、おじいちゃんは？」

「おじいちゃんは、そうねえ……」

おばあちゃんはちよつと考えてから、にっこりと微笑んだ。

「おじいちゃんは、私のカレよ」

おばあちゃんの足元で欠伸をしたのはハズバンドだった。

おばあちゃんとおじいちゃんは何だかんだ言って、ラブラブだった。
このときはそれが不思議だったけど。

ハズバンドは犬（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

私がブログをやっていた時、二年ぐらい前にアップしたお話です。だれからも読んでもらえなかった可哀想なお話です。

（誰にもブログを教えてなかったので、訪問してくれる人も少なかつたため）

私にとって愛着のお話なので、続きを考えて、もう一度書きました。

ほのぼのしたお話ですが、よろしくお願いします。

ハズバンドと祖父

ハズバンドはとてもおじいちゃんに懐いていた。

ハズバンドはおじいちゃんの姿を見ると、ワンワン吠えて尻尾をブンブン振って飛びついた。

本当に二人は信頼し合ってるようだった。

そんなことはなかった。そのことに気がついたのは、高校三年の秋だった。

「ねえ、おばあちゃんに柿を届けてくれない？」

その日は休日だった。

私は昼過ぎに起きて、昼ご飯になってしまったタコライスを食べていた。

最近勉強ばかりで部屋にこもりっきりの娘の気晴らしのつもりか、それとも最近私が全然遊びに行っていないので寂しがっているおばあちゃんに気をつかってか。

お母さんは起きぬけの私に手を合わせた。

「んー。いいけど」

大学受験生の私は高校三年の夏休みが終わり、やっと勉強にやる気を出したところだった。

そしてやる気を出したはいいが、山積みになされた問題集に飽きてきたところだった。

「わー、ありがとう！ 友達から沢山柿が送られてきたのよ」

お母さんは手を叩いて大げさに喜び、玄関に放置してあったダンボールを取りに行った。

Ｌサイズのダンボールの中身はぎっしりと詰まった柿。

私の家を何人家族だと思っっているのだろう。

お母さんはイソイソと柿の仕分けを始めた。

お隣さんとお向かいさんには4個ずつ……ブツブツ言っているのが聞こえる。

私は目玉焼きの黄身をフォークで突きながら言った。

「ついでにおばあちゃんンちにも渡してくればいいのに」

お母さんは私やおばあちゃんに気を利かせてくれているのだろう。

そう分かっていた私の意地悪のつもりだ。

ところがお母さんの返事はとても的外れなものだった。

「だって私、お母さんと電話でケンカしちゃったの。気まずいじゃない」

「あら、いらつしやい。わざわざありがとだね」

両手いっぱい柿を抱えた私は、ドアを開けることが出来なかった。

おばあちゃんの家は数え切れない程行ってるのに、インターホンは数回しか押したことがない私だが、しょうがないので押した。

おばあちゃんはびっくりしたようだったが、柿の入った袋を見せると納得したようで、快く迎え入れてくれた。

玄関に入るとハズバンドがのっそりとやってきた。

私の顔を見て尻尾をパタパタ振った。

「ハズバンド、久しぶりだねー！二週間振りぐらい？」

私がハズバンドの頭を撫でると、ハズバンドはフガフガと柿の入った袋を嗅ぎ、フンつと鳴いて居間に戻ってしまった。

「あれー、ハズバンド柿嫌いなのかなー」

おばあちゃんにそう言うと、

「ハズバンドは食べたことがないんだらうなー」

と奥の方で声がした。

おばあちゃんの声ではない。

私は一瞬、ほんとーに、誰の声だか分からなかった。

おばあちゃんの家には何十回、何百回、数え切れない程行っているのに、その声をおばあちゃんンちで聞くのは正月だけだ。

今年の正月、家族で新年の挨拶でここに来て以来、十ヶ月振りに見たおじいちゃんは元気そうだった。

「お・おじいちゃん！ 何でいるのー!？」

私はおじいちゃんと、おじいちゃんにピッタリと寄り添ったハズバンドを見比べながら聞いた。

「そらあ、いるさ。ここは俺の家だぞ」

おじいちゃんは何でそんな質問されるのか分からない、と言う顔だ。私は台所の隅に柿を置くと、急いでおじいちゃんの前に座った。

綺麗に磨かれた低いテーブルの上には、コスモス小さい花瓶にが活けてある。

「だつておじいちゃん、いつも家にいないじゃん」

「いちゃ悪いか、と言つたおじいちゃんの横でハズバンドが「ブー」と鼻を鳴らした。

台所に立っているおばあちゃんが、フツツと笑つて

「今日は佐々木さんと会う予定だったんだけど、佐々木さん、突然入院されてね。」

お父さん暇になつちやつたのよ」

と教えてくれた。

佐々木さんは私も知っている。おじいちゃんの子会社の同僚だった人だ。

おじいちゃんのお兄さんが一昨年亡くなったときにはお葬式にも出てくれた。

「佐々木さん、大丈夫なの？」

私が心配して言うと

「自分たちの階段から二三段滑つただけで、足にヒビが入つたんだとよ。」

日頃から運動してねーからだ」

とおじいちゃんは眉を寄せた。

「年を取ると体が動かなくなりますもの」

おばあちゃんがそう言いながら、剥いた柿を山盛り持ってきてくれ

た。

「そういう事じゃねーよ。意識して動けば歳くっても、元気でいられるっつーことだ」

おじいちゃんはフオークを無視して四等分してある柿をひとつ掴むと、ガブリと豪快に齧った。

「おじいちゃんは元気過ぎだよ」

おじいちゃんはいきなりすつくと立って言った。

「よし！ 散歩行くぞ」

ハズバンドがウオンと鳴いた。

私はおじいちゃんの横を歩く。

私とおじちゃんの間には、リードを付けられたハズバンドがアスファルトをフガフガと嗅ぎながら歩いている。

おじいちゃんが無謀にも、片二時間は掛かる「海まで行くぞ！」と言ったので、私達二人と一匹はのんびりと歩き続けている。

会話が続かない。

一年に一度しか会わないおじいちゃんと何を話したらいいのだろう。

「勉強はどうだ」とおじいちゃん。

「まあまあ」と私。

「部活はやってるか」とおじいちゃん。

「もう引退したって」と私。

時々ハズバンドも「バフツ」と会話に入ってくれるが盛り上がりがない。

それでも、暖かい気候とさわやかな風に吹かれて、ま・いいかーと私は歩く。

時々おじいちゃんの顔を見上げるハズバンドに気がついた。

よっぽどおじいちゃんに懐いているようだ。

「何で、ハズバンドはおじいちゃんに懐いているの？」

私は少し前を歩くハズバンドに聞いた。

「そりゃあ、飼い主には懐くだろう」

おじいちゃんが言った。

「それに、売れ残って値引きされたコイツを選んだのは俺なんだぞ
俺は保健所送りにされるところだったコイツを救ったんだ」

私は知っている。

ハズバンドを選んだのはおばあちゃん、ハズバンドは値下げどころかペットショップに来たばかり子犬だった。

いつだったか、おばあちゃんに聞いたのだ。

「うそつき」

「あれ。違ったつけ」

ワザとらしく「いい天気だなー」と空を見上げるおじいちゃんを、ハズバンドはやっぱりチラチラ見上げていた。

しかし道は長かった。

一時間程歩いたところで、ハズバンドがハアハア言い始めた。
私も足がだるくなってきた。

休憩しようよ、とおじいちゃんに言おうとした時、ケータイが鳴った。

私ではなく、おじいちゃんのだ。

「いつの間にケータイ買ったの？」

私は慣れた手つきで電話にでるおじいちゃんに驚いた。

ハズバンドが目をキラキラさせておじいちゃんを見上げる。

尻尾をブンブン振り回していた。

「悪い。俺は帰る」

楽しそうに電話を終えた後で、おじいちゃんが言った。

「え、何で？」

「急用が出来た。すまん。少しだけだが、これで何か食べる」
そう言っただけで千円くれたおじいちゃんはタクシーを捕まえると、去っていった。

走っていくタクシーに向って、ハズバンドがワンワン吠える。

もつと怒れ！ ハズバンド！！

電話から聞こえた声は「これから呑みに行かないか」で明らかに遊びの誘いだし

おじいちゃんのケータイは私のより新しいモデルだった。

「おじいちゃんのバカー！」

私は小さくなつて見えなくなったタクシーに向つて、小声で呟いた。

一時間後、私とハズバンドは海にいた。

「海だよー、ハズバンド」

ハズバンドは海に向つて二三回尻尾を振った。

「随分遠くまで来ちゃったねー」

潮風はベタベタと髪に纏わりついたが、意外に大きな波の音が私は好きだ。

「走るかー！」

リードを外したハズバンドは波打ち際をすれすれに走った。

私はハズバンドを追いかけて靴下まで濡れた。

季節は秋で、潮風が寒くて、私とハズバンドはくしゃみをした。

髪がバリバリになるまで遊んで、コンビ二で買ってきたミネラルウォーターを二人で飲んだ。

海を後にしたのは、海に夕日が沈む頃。

落ちる夕日と競争するように帰った。

「さささささ寒い〜」

私は凍えながら、おばあちゃんの家に戻ってきた。

さすがに砂だらけなので、玄関でおばあちゃんを呼んだら、すぐにお風呂に入らせてもらった。

ハズバンドと一緒に。

ハズバンドはシャワーが嫌いなのか、シャワーにワンワン噛み付こ

うとする。

「おばあちゃん、何でハズバンドはおじいちゃんに懐いているの？」
やっこのことでハズバンドを洗って、風呂から出し、私は湯船に浸かりながら聞いた。

脱衣所ではハズバンドがおばあちゃんに拭いてもらっている。

「フッフ。おじいちゃんはねえ、ところ構わずハズバンドにおやつをあげるから」

ハズバンドがブルブルと水を切った。

「コラっハズ！」

と言うおばあちゃんの悲鳴が聞こえた。

おじいちゃんはいつも自分勝手だった。

自分が友達と遊びに行きたいと思うと、あばあちゃんの事なんかそっちのけで、孫の私にだって全然気を遣わなかった。

私はずっと、おじいちゃんは自分勝手な人なんだと思ってた。

おじいちゃんが死ぬまで、ずっと。

ハズバンドと祖父（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

一話がとても長く、書いてる私ですら飽きてしまいそうです…

でも（今回は）最後までできっちりと考えてあるので、大丈夫です！

……大丈夫かな

問題点の指摘、ございましたらお願いします。

パピーと父（前書き）

お母さん視点で、昔の話です。

パピーと父

お父さんはとても良い父親だった。

仕事が忙しい時以外は家に早く帰って来て、勉強を教えてくれた。

日曜日は当然家族サービス。

毎週毎週、家族でドライブに行った。

お父さんは戦後すぐの生まれだが、男尊女卑することなく、お母さんを敬っていたし、愛していたんだと思う。

私はとても幸せな子供だった。

家に帰ったら優しいお母さんがいて、怒ると怖いけど頼りになるお父さんがいて。

一人っ子だったこともあって、本当に大事にされて育った。

けれど大きくなるにつれ、家族を窮屈に思うようになった。

沢山の恩に気がつかず、早く家を出たいと思っていた。

大学生になって、私は家を出た。

全然家に帰らず、就職先も両親に相談せず決め、知り合った今の夫と結婚することに決めた。

結婚式を控えて、実家に戻ったとき、お父さんは変わってしまった。いた。

毎日毎日、何処かに遊びに行き、帰ってくるのは夜遅く。

仕事の日は毎晩呑みに行つて、帰って来ない。

最初、その変貌は私の所為だと思った。

一人娘がフラフラしているから、ストレスが溜まって気が変になってしまったんじゃないかと思った。

それぐらい衝撃的だったのだ。父の変貌が。

けれど、違った。

それは結婚式の前の晩。

お父さんに泣いて謝ったときのこと。

私とお母さんはお父さんの帰りを待っていた。

こんな大事な日なんだから今日は外に出ないだろうと思っていたお父さんが、お母さんの制止を振り切って、遊びに行っただま帰って来ないからだ。

「遅いわね」

アルバムを見ていたお母さんが時計を見て呟いた。

時間は22時。

チクタクと時間を刻む針の音が聞こえるほど、静かな夜。

「今日は仕事の後輩と桜を見に行くって言ってたけど」

お父さんは、毎日友達と会う約束をしている。

「まさか夜桜まで楽しんでるのね」

お母さんはタメ息を吐いた。

私はいたたまれなくなった。

明日は私の結婚式。

隆久を紹介したときは歓迎してくれたが、本当は結婚を反対しているのかもしれない。

私ที่บ้านに帰ってから毎日、外に出るのは抗議の印か。

「お母さん、お父さんは私の結婚に反対しているの？」

「そんなことないわ、隆久さん、とっってもいい人じゃない」

私の夫とは合コンで出会った。背が高く、顔も良くて、何より穏やかな人だ。

「でも、お父さんは認めてないんじゃないの？」

私が帰ってから、全然顔を合わせようとはしないじゃない」

お母さんは考えるように目を瞑った。

「あなたには言わなくてもいい話だと思っていたんだけど。

一息おいてお母さんは言った。

「お父さんが毎日毎日、外出しているのはね、お友達が死んでからなの。」

私とお父さんの友人で、お父さんの幼馴染の方が、二年前に亡くなってね。

それからは毎日色んな知り合いに会いに行ってるみたい」

お母さんは入社した会社で、お父さんと知り合った。

お母さんは受付嬢。お父さんは販売員。大きくも小さくもない会社だったから、顔は知っていた。

お父さんに声を掛けられて親しくなり、友達を紹介された。それが亡くなったお父さんの幼馴染。

「三人でよく遊んだわ。会社の帰りに花火を見に行ったりね。」

三人で遊ぶうち、お父さんとお母さんは付き合うようになった。

「それからは私が紹介した後輩の子と四人でいるようになって。

めでたく、お互い上手くいって、結婚して。

結婚してからはあまり会わなくなっちゃって、疎遠になってたのよ」

でも、話したことはお父さんには内緒よ。そうお母さんは言った。

「余り触れられたくない話題みたい。とても大切な友達だったから」

お父さんは大切な友人を亡くして、寂しくなってしまったのだろうか。

だから毎日誰彼構わず遊んでいるのだろうか。

やっぱり、私ที่บ้านにいなかったから？

「あら、泣かないの！」

私はいつの間にか泣いていた。

お父さんが可哀想で、側に居てあげなかった自分が許せなくて。

お父さんが帰ってきた。日にちは結婚式当日になっていた。

「そう言えば、そうよ」

私は実家で犬を飼ったことを聞いて、見に行った。
変な名前の真っ黒い子犬を見ながら、思い出していた。

「私の結婚式の前の日、お父さん呑んだくれてベロベロになって帰ってきて！」

「そうだったか」

お父さんとはぼけていたが、お母さんはクスクス笑って

「そうですよ」

と言った。

娘の春子がそつと子犬の尻尾を触っている。

さっきまでお母さんに犬のことを色々聞いていたが、質問するのに飽きたのだろう。

息子の隆は果敢に子犬の口元を触っては、甘噛みされてイテーイテーとはしゃいでいる。

二人は走り出した子犬を追ってリビングから出て行った。

「変なもの食べさせちゃダメよー」

私は二人の背中に言った。

思えばあれから随分時間が経ったようだ。

私に子供だ出来ている。二人も！

「お父さん、幸せ？」

私はお母さんが台所に立ったのを見計らい、お父さんに聞いてみた。

「俺か？ まあまあ幸せだよ」

お父さんはお爺さんらしく「うんうん。幸せですよー」と言い直した。

「まだ、毎日遊んでいるんですよ」

私はずっと聞きたかったことを聞いた。

お父さん、孫が二人も出来て、もう寂しくないですよ。

「なんで？」

「何でってそりゃあ」

お父さんは珍しく口を濁した。

「お友達が亡くなってからって聞いたよ。

寂しかったんじゃないの？」

お父さんは「違うよ」と言った。

お母さんがお茶のおかわりを持ってきて座った。

「そうじゃねーよ。アイツが死んで、何も出来なかったことを後悔したんだよ。

もう後悔しないように、ダチ作ったら、時々会うようにしてる」

後から聞いた話、お父さんの幼馴染は借金を苦に自殺した

らしい。

私は何も言えなくなってしまった。

お父さんはいつか、いなくなってしまふ友達を大切にしようとしている。

でもその所為でお母さんは毎日家に一人ぼっちだ。

「お母さんは寂しくないの？」

「前は寂しい時があっただけど、今はハズバンドがいるから」

お母さんはいつもお茶で手を温めながら、笑っていた。

「お母さんにとっての『ハズバンド』なんでしょ」

「あの犬か？」

「そうよ」お母さんが力強く答える。

私は想像した。

きつとお父さんは昔のようにお母さんを想ってる。

お母さんが寂しくならないよう犬を飼ったのかな。

だったら自分が側にいてあげればいいのに。不器用なんだから。

「だったら私のパピーだ。この犬は」

いつの間にか机の下に隠れていた子犬。

春子と隆が、二階で子犬を探している声が聞こえた。

「お前まで俺を認めないつもりか」

お父さんが呆れて言った。

私はニコリと笑って

「お父さんって意味のパピーじゃなくて、子犬って意味だもん」と言っただけだ。

お父さんは苦笑してから

「そう言えばお前も酔っ払ってたじゃないか」

と思いつくように言った。

「そうでしたね」

お母さんが言う。

「ほら、結婚式の前の日。お父さんが遅くに帰ってきて」

そうだった。

私は帰ってきたお父さんに負けないくらいデロデロに酔って、

泣いて謝ったんだ。

記憶が鮮やかに蘇って、あの時の二日酔いまで思い出して、頭が少し痛くなった。

「結婚式、頭、痛い痛いって大変だったじゃないの」

「ホント。新婦の顔が真っ青なんて、親としてかつこ悪かったなあ」

親不孝でごめんなさい。ごめんなさい。私、幸せになるから。

そう言っただけ、酔っているお父さんに泣いて謝ったんだ。

懐かしくて恥ずかしい。

でもお父さんは言った。

「俺が反対しても子供は生まれるんだろ。反対なんて出来ないさ」
酔っ払って歌うように言った。

「幸せになれよ、一人娘。大事にしろよ、腹の娘」

「そうだった」

私は惚けた。

お母さんが「しょうがないわねえ」と笑った。

あの時と同じように。

パピーと父（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

時間軸が分かり難く、また今回の主人公も前回と違っていたので、読み難かったと思います。

最初はお母さんの結婚式の前日の回想。

それからおばあちゃんがハズバンドを飼って、初めて娘と孫がハズバンドに会うシーンです。（一話にちよこつと出てた所です）

今回はまた孫の春子視点になります。

ありがとうございます。

宜しければ感想や指摘、お願いします。

祖父の死

おじいちゃんが死んだのは、私が大学生の時だった。

当時私はサークル活動と就職活動で忙しく、家に帰るのが遅かった。だから、当然のようにおばあちゃんの家遊びに行くのも全然なくて、

最後のサークル活動の日、お別れ会と称して皆でお酒を飲んでいる途中、母からおじいちゃんの訃報の知らせを電話で聞いて、慌てて帰ってきた。

突然のことで、悲しいと言うよりびっくりした。

おじいちゃんはお風呂で倒れていた。心筋梗塞だった。

「ハズバンドが吠えて知らせてくれたのに……」

おばあちゃんの家で行われたお葬式で、おばあちゃんはハンカチを目に当てて言った。

その横でハズバンドが寝そべっている。

もしかしたらハズバンドはおじいちゃんの死が分からないのかもしれない。

その場の重苦しい空気だけは分かって、悲しそうなおばあちゃんの横から離れない。

私だって全然実感が湧かなかった。

棺の中のおじいちゃんの白い顔を見て、恐ろしいような気持ちになった。

だって、悲しい気持ちになるほど、私はおじいちゃんの思い出が多

くなかった。
いつもいつも家にいず、どこかに遊びに行っていて、正月に会うときだって会話が見つからず気まずかった。

おじいちゃんを思い出すとき、決まってハズバンドがおじいちゃん
の側にいた。

そう言えば、一回だけ、駅でハズバンドとおじいちゃんが散歩して
いるのを見かけたことがある。

私の所属するサークル「うまいもん」は名の通り、美味しい食事の
お店を探すサークルだ。

一週間に一回、夕食を食べに行く。基本居酒屋の飲みサークルだ。
私は大学に入ったばかりで、だからいつも飲み過ぎて帰ってきた。
そんな私にお母さんは怒ったが、「だって楽しいんだもん」と私は
サークルをやめたりしなかった。
親子の中があまり良くないときだった。

そんなある日、サークルで夕ご飯を食べた帰り、終電より一本前の
電車で家の最寄駅に降り立った私は、ちょうど通りかかった、おじ
いちゃんとハズバンドに出会った。

「こんばんわー、ハズバンド、今日もかわいいね」

私は酔っていたのでよく分からない挨拶を二人にした。

おじいちゃんは驚いたように

「久しぶりだなー。合コンの帰りか？」

と聞いてきた。ハズバンドがしゃがんだ私の口をフンフンを嗅いで
いる。

「違うよー」

と私は返事をした。

それから三人で家に帰った。

夜に散歩に行くとは聞いていたので、偶然だなーと思っていた。

「お父さん、春子の帰りを心配してよく駅まで迎えに行っていたのよ」

お母さんが泣きながら教えてくれた。

そんなの今言わないでよ。

私は「そうだったんだ」としか言えなかった。

どうして今頃になって言うんだらう。

もう私はおじいちゃんと話せないのに。

生きている時に教えて欲しかった。

「全然知らなかったよな」

弟の隆がポツリと言った。

「俺おじいちゃんとの思い出、酒ブタしかないよ」

私も覚えている。

私が小学生の頃、お正月におばあちゃんの家が集まったとき、酔っ払ったおじいちゃんが弟が大事にしていた酒ブタを口の中に入れ、

「ほら消えた！ マジック！！」

と消失マジックもどきをやったのだ。

結局弟は大泣き。私は急いでおじいちゃんの口から酒ブタを出させ、洗いに行ったが、おじいちゃんが平謝りしても弟の機嫌は直る事がなかった。

「おじいちゃんって毎日遊び呆けているイメージしかなかった」

「私も」

肅々と葬式は進み、お坊さんが帰ったあと、お母さんが教えてくれた。

「お父さんはちゃんと毎日、家に帰っていたし、お母さんを大事に

思っていたのよ」

おじいちゃんが毎日遊びに出る理由を知ったとき、私は悲しくなりました。

おじいちゃんが死ぬ前に知りたかったから。

そうしたらもつとおじいちゃんと話すことが出来たかもしれないし、おじいちゃんのこと勘違いせずに済んだんじゃないかって。

もう遅いけど。

大人って、子供に隠すっていうか、知らせなくても良いことだって一線を引いている所がある。

ほら小さい頃のサンタさんの真実やローンの話とか、自分達の恥ずかしい失敗談や青春とか。

知らされていない私達は真実を間違っ覚えてたり、綺麗に思い描いたりしてしまう。

そして遅すぎた真実に傷つく。もっと早く知りたかったって。

さすがに火葬場まではハズバンドは連れて行けなかった。

おじいちゃんの棺が外に運ばれているとき、ハズバンドが悲しそうに吠えた。

私は初めてハズバンドが遠吠えするのを聞いた。

その声は本当に悲しそうで、私はそこで初めて涙を流した。

祖父の死（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

もう少し、続きます。

感想、問題点のご指摘、宜しければください。

最近文章が上手く書けなくて困っています……

ハズバンドと犬

私は、幸せな人生を歩んで来たと思います。

戦後、焼け野原になった町で、辛いこともあったけど、復興を遂げる町と一緒に私は生きてきた。

人よりほんの僅かに裕福だった私の家は、農家でした。

私は女学生になって、会社に就職して、あなたと出会い、娘が生まれ、孫が二人もできた。

これ以上、幸せは望めません。

だけど、わがままを言うようなら、もう少し長生きして欲しかった。「ありがとう」

最後の一言だけ、言葉に出した。

おとうさんのお葬式。棺の中に花を入れて、おとうさんの顔を見た。出会ってから45年。

数字にすると長いようだけど、振り返ってみるととても短く感じるのね。

ハズバンドが私に寄り添ってくれる。

私のもう一人の夫。

一人だけになっちゃった夫。

真っ黒い鼻を私の横腹に押し付ける。

「慰めてくれるのね」

大声で泣きたいのに、涙が雫にならないのは歳の所為だわ。

ハズバンドの悲しそうな遠吠えを聞いたとき、周りの音がいきなり

私の耳に飛び込んできた。

ハッと周囲を見回すと、娘が私の肩を支えている。

孫の春子は堪えきれないように声を上げて泣いている。

娘の旦那さんである隆久さんと孫の隆と親戚の叔父さん達で、夫の

棺を運び出していった。

どうやら私はお葬式の間、ボーっとしていたらしい。

ハズバンドの声で、目が覚めた。

「ハズバンド、いい子で待っていてね」

私はハズバンドを撫でた。

おとうさんが亡くなって、私はハズバンドと二人きりになった。

娘と一緒に暮らさないか、と言ってくれた。

私はこの家が捨てきれなくて、思い出と離れたくなくて、決めかねている。

思えば彼はいつも自分勝手というか、一人で決めてしまうところがあつた。

生まれた娘の名前を決めたのも彼。

家を決めたのも彼。

そしておとうさんの友人が亡くなり、毎日どこかへ行ってしまった。

「出来た友人を一人残らず大事にするんだ」

と言つて。

犬を飼うことを決めたのも彼。

だけど、そうだ私が決めたことが二つある。

一つは犬のハズバンドと言う名前。

もうひとつは……彼との結婚。

彼が死んで、私は何をしていたのか分からなくなってしまった。そこまで依存していたのだろう。

彼はとても優しくて頼りがいのある、男らしい人だったから。

私は決めた。

毎日のように添い寝してくれるハズバンドを撫でていたある晩。ハズバンドの顔を見ていて決めた。

ハズバンドがいなくなるまでは、ここに残ろう。

孫の春子が遊びに来た。

就職活動やら忙しそうなのに、頻繁に遊びに来てくれる。

「広くなっちゃったね。家」

春子はハズバンドを撫でながら言った。

「もともと、おとうさん全然家にいなかったじゃないの」

私は春子にお茶を出しながら言った。

「そうだけど、私は二人と一匹がちょうどいい快適な空間だと思ってたから。」

おばあちゃんは広く感じない？」

きっと春子も一緒に住もうよ、と思ってくれているのだろう。

だけど私は言った。

「ハズバンドが私を守ってくれている内は、私がこの家を守らな
き
や」

おとうさんの思い出と一緒に。

「そっかー」

春子は不満そうに言う。

「でもしょうがないね」

「ええ」

春子がハズバンドの散歩に行くと言い出した。

私はいつも通りお留守番して、その間部屋の掃除しようと思ってい

ただ

「おばあちゃんも一緒に行こう」

と春子が言っただけで、一緒に行くことにした。前を歩くハズバンドを見ながら、春子が私に言う。

「おじいちゃんとの昔話とか、聞きたいな」

その、辛くなかったらでいいんだけど」

私は春子の優しさを知っている。

きつと忘れないように、知りたいのだろう。

「いいわよ。私もちようど思い出していたところだったの」

私は言った。

もし私が死んでしまっても、記憶は娘や孫や友人に残る。

もしかしておとうさんは忘れてしまわれないうちに、あんなにも必死に友人に会いに行つたのではないだろうか。

他の人の心に残るために。

「あの人は臆病なところがあつたわ」

「臆病？ うそー！」

自分が消えてしまわないように。

結果的に、孫には存在感のない祖父になってしまったけれど。

「琵琶湖に行つたときのことなんだけれど……」

でもね、人は永遠に繋がっている。

おとうさんはいなくなつてしまつたけど、私が生きてるし、

私が死んだら娘。そのまた子供。

ずっと続いている。

だからおとうさん、大丈夫ですよ。

あなたは一人じゃなく、私も沢山の友人もいるんだから。

安心して逝ってください。

私は暖かな日差しに包まれ、どこかにいるおとうさんに心の中で話かけた。

春子に話す声が思わず、涙声になった。

ハズバンドと犬（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

あと一話で終わります。

やっと、やっとです。

もう自分が飽きかけてて、文をまとめるのがとても大変になっていました。

きちんと終わらせたいと思います。

皆様、もう少しだけよろしく願います。

次回、おじいちゃん目線予定。

俺と犬

妻が選んだ犬は鼻まで真っ黒く、手足がでかかった。

俺は暇があるたびに、コイツを庭に連れて行き、日向ぼっこしていた。

「暇だなー」

俺は犬と縁側に出ていた。

犬は子犬だからか、俺の太ももの上で寝ている。

遊びに行こうと誘ったのに、三人に断られた俺は、今日、暇になっ
てしまった。

きつとこんな日は外出するべきじゃないんだと、自分に言い聞かせ
て。

犬は時折、ブブッと鼻を鳴らす以外は死んだように寝ている。

俺は陽だまりの中、昔の事を思い出していた。

ダチが死んだ。

学生時代から、知っていた奴とは会社も同じで、お互い腐れ縁だと
思っていたが、良く飲みにいっていた。

奴の初恋が実らなかったとき、俺が留年した時、奴の卒業、俺の就
職。

俺の一年先輩として会社に入った奴は、後輩の俺に言った。

そのときも二人で飲んでいた。

「新しい受付嬢の山内さん、かわいいよな」

「うん？」

俺は入ったばかりで、右も左も分からなかったから、女の全然見て

いなくて、誰の事だか分からなかった。

「紹介してくれよ」

奴は情けない顔をしていた。

本当に女々しい男だったと思う。

奴に女を紹介して、恩を売ろうと思って彼女に声を掛けた。

しかし俺は彼女に一目惚れしてしまったのだ。

奴と俺と山内さんで、よく遊びに行った。

海や山や湖。

俺は奴に嫌われるんじゃないか。自分が最低だと思われるんじゃないかと臆病になり、

自分から山内さんに近づかなかった。

しかし山内さんが俺に惚れてしまった。

一回告白され、断り、二回目です承した。

山内さんに嫌われるのが怖かったのだ。

奴はそんな俺のことを知っていた。

知っていて、俺に言ったのだ

「しょうがないなあ。俺に女を紹介してくれたら許すよ」

そうだ。あの時も二人で飲んでいた。

奴は顔を真っ赤にさせ、笑っていた。

そして山内さんの友達と奴は付き合った。

お互い、上手くいき、結婚した。

俺は奴にバラされるのが怖くて、奴とは疎遠になった。

「思えば、俺は臆病だった」

俺が一言言つと、犬が起きて、尻尾をパタリと振った。

そうして疎遠になって、奴が転職すると、奴が死ぬまで会わなかった。

年賀状のやり取りだけ、妻がしていた。
だから俺は気が付かなかった。
奴が借金に苦しんでいることに。
そして奴は自殺したのだ。

俺は自分を責めた。
女々しくて、弱い奴だと俺だけは知っていた。
それなのに、俺の勝手で、助けられなかったのだ。
そして作った友達は最後まで面倒をみようと、思った。

「お前はかあさんを最後まで守れよ」
俺は犬に言った。

もしかしたら、俺は臆病だから犬を飼ったのかもしれない。
犬がいればかあさんは寂しくない。
俺は恨まれることもない。

俺は娘をちゃんと躡けられなかった、ダメな父親だ。
どうしてだつて、娘は俺の言うとおりにしなかった。
自分勝手で。
誰に似たのだろう。

だけど、妻は俺についてきてくれた。

俺はかあさんより後には死にたくない。
かあさんを失って、生きるのは耐えられない。

だから犬を飼ったのかもしれない。

うららかな午後の陽気の中、子犬に散歩をさせてやらないのは不憫だと思った。

「散歩に行くぞ」

俺が声を掛けると、膝の上の犬が飛び起きてウオンと吠えた。

久しぶりに奴の墓参りにでも行ってやるか。と思った。

俺と犬（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

人生って色々あります。

人の心のなかはその人しか知らない。

たとえ親のことでも、若いころ何を思ってたのか、全然知らない。

私は思っています。

人は思っているほど、単純には生きていない。

だから分かり合えないことって、沢山あるし、完璧にその人を理解することなんて出来ない。

この小説の主人公春子は祖父の事を、「勝手な人」だと思っていた。

春子の母は自分の父を、「かわいそうな人」

祖母は夫を「臆病」だと分かっていたけど、本当のことは理解していなかった。

自分は自分。一人だけ。

ハズバンドは犬で、誰かを理解しようとか、思ってなかったけど、側にいる。

それだけで、いいような気がします。

側にいるだけで、体温はあたたかい。

後書き長くなりました。

本文に書ききれないことを書いているわけですから、もっと上手く本文に自然に書けるように精進します。

読んでくださりありがとうございました。
感想、ご指摘、ご意見。宜しければよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3795p/>

ハズバンド

2011年1月4日23時44分発行